

報告

## 韓国語学習におけるアクティブ・ラーニング実践

金 恵媛\*、木下 瞳\*\*、兒玉 悠梨乃\*\*\*、サポリトダシルヴァ カミーラ亜由実\*\*\*、角 明莉\*\*\*\*、徳永 琳\*\*\*\*  
Hyeweon Kim, Hitomi Kinoshita, Yurino Kodama, Camila Ayumi Saporito da silva, Akari Kado, Rin Tokunaga

### <要旨>

Implementing Active Learning in Korean language Education

This paper discusses the background and issues surrounding Korean language learning and reports on the results of active learning practices implemented in class and self-study exchange groups carried out in the 2023 academic year. First, in class opportunities for group study were increased, allowing students to teach each other, and quizzes in every class were conducted to support students' independent learning. In addition, active learning through culture was actively promoted to further increase student motivation.

As extracurricular activities, two types of offline study sessions to prepare for the 'Test of Proficiency in Korean', as well as multiple online study sessions were conducted as part of the club activities. Although management of the self-study sessions was challenging, the participants expressed a high level of satisfaction. Carrying out this activity as part of the student club activities is one factor that facilitated the establishment of the self-study exchange meetings. Despite the burdens that accompany active learning, students were able to increase their amount of learning and their motivation to study was also stimulated by fellow learners, and therefore the overall environment for learning Korean was improved.

キーワード：韓国語授業 自主学習 課外活動 オンライン交流 アクティブ・ラーニング

Keywords : Korean Language Classes, Self-Study, Extracurricular Activities, Online Exchange, Active Learning

### 1. 韓国言語文化授業の課題とアクティブ・ラーニング

#### (1) 韓国語学習の背景と課題

人生100年時代である。「情報化やグローバル化といった社会的変化が人間の予測を超えて進展する」<sup>1</sup>現代における長生きとは、不測の変化を経験する期間の長期化を意味していよう。退職してからの期間が長くなることにも注意が必要である。高齢期は、学校や職場など、所属先からの組織的なサポートを得にくいからである。そのため、変化やリスクに気づき、解決するまでのほとんどの過程が、一人ひとりの知識や判断にゆだねられる。また高齢期がそれまでの人生の延長線上にあることから、生涯にわたって自律的な生き方を育成し続けることが強調されている。高齢化社会の進展とともに、個人の力量を強化する方向へと社会の様々な領域に対する見直しが進む理由である。学校教育も例外ではなく、新しい学習指導要領では、変化に対して能動的に取り組む人材の育成が力説されている。従来の知識伝達型から「主体的・対話的で深い学び」へと見直しを進め、高齢化社会に適した学び方、すなわち生きる力を身につけていく考え方である。

大学の外国語教育においても「主体的・対話的で深い学び」が求められている。英語に比べ授業数が少ない第2外国語科目では、自主学習の定着がより重要な課題となっている。共用語としての位置づけが強い英語と違って、学習目的及び到達目標に個人差が大きい点も、主体的な学習管理が求められる背景である。さ

\*山口県立大学国際文化学部教員、\*\*山口県立大学国際文化学部国際文化学科実習助手、\*\*\*山口県立大学国際文化学部国際文化学科3年、\*\*\*\*山口県立大学国際文化学部国際文化学科2年。なお本稿は、第1章(金)、第2章(1)・(2)(木下)、(3)(サポリトダシルヴァ)、第3章(1)・(2)(兒玉)、(3)(角、徳永)、「おわりに」(金)が分担執筆した。

らに、言語スキルの向上だけでなく、当該言語が用いられる社会文化に関する知識と理解、そして交流活動を伴う学びである点からも、外国語授業では対話的で深い学びが求められる。

筆者の所属する国際文化学部<sup>1</sup>の授業、国際文化学科の学生が1～3年次に「韓国言語文化」を計12単位履修できるカリキュラムとなっている。このうち、1年次の4単位が選択必須科目であり、各学年の前期と後期に週1回授業を受けるような設計である。韓国語が初修外国語であることを勘案すると、正規の授業だけで言語スキルの向上を期待することは厳しい。そのうえ、大学が位置する地域は外国人住民が少なく、キャンパスの外で日常的に韓国の言語や文化に接することが容易な環境とはいえない。クラスの規模面においても課題がある。近年のK-pop人気の影響もあって、大人数クラス（2023年度の初級、中級クラスともに40～45人）の運営となっている。同じ影響因から、学習目的や到達目標、語学能力が著しく異なる学生が初級クラスで一緒に学ぶ状況が続いている。入学の段階で高い韓国語能力をもつ学生や、将来、韓国留学・就職を目標に受講している場合も珍しくない<sup>2</sup>。一方で、韓国語を初めて学ぶ学生が、自分と周りの既習者の語学能力を比較して学習に不安を抱いたり、相談に訪ねたりすることもある。このような状況から、筆者らは、授業内外で韓国語に関心がある学生に自主学習を強くすすめるとともに、学習仲間との連携が図りやすい環境づくりを進めることになった。

## （2）授業での取組み

韓国語の授業では、言語能力の向上と学習意欲の刺激を主に行い、さらに課外活動との連携を図っている。ここでは、2023年度後期の初級（1年次）・中級（2年次）授業で試みた3つの活動である、随時テストの実施、グループ活動の多用、そして文化理解学習の導入を中心に紹介する。

1つ目は、随時テストの実施である。随時テストは学習動機の刺激をねらいとし、毎回の授業の冒頭において5～10分程度実施している。テストでは語彙や文法、短文作成など、授業内容の復習をクラス単位で行った。1年生の場合、選択必須科目、つまり到達目標が多様であることを考慮し、毎回のテスト結果を評価対象にはしていない。ただ、毎回の復習を促す仕掛けとして、正解を追記したテスト用紙をレポートとして提出してもらうことにしている。このように、自分の学習状況や習慣を繰り返し観察することを通して、学生が自身の学習方法を見直し、自主学習を習慣化することを期待している。随時テストのもう1つのねらいは、語学学習に必要な暗記の習慣化を図ることにある。その気になればいつでもどこでもスマートフォンで検索し、簡単に情報を得ることができる時代である。日常生活のなかで「覚える」行為が自然に消えていくなか、語学学習でもスマートフォンを手放せない様子がしばしば観察される。語彙・表現数が不足して短文が作れないのでは、語学能力の上達は期待しにくい。よって暗記量の負担の少ない随時テストを活用し、暗記学習をすすめるようにしている。

2つ目は、グループ活動の多用である。グループ学習ではメンバー間で教え合う活動を奨励した。学生からは、教えることで学習内容の定着率が高まった、少人数グループだから気軽に質問できた、友人の真似をして発音ができるようになった、というふり返りがあった。このような取り組みは、学習レベルの差を活かした協働学習であり、学習定着度の向上を図る方法としても有効と考える。よって、今後も継続的に実践していきたい。

3つ目は、文化理解学習の導入である。韓国語の敬語表現の差異のような「言語文化」の違いにとどまらず、言語と直接関係はないが、日韓の相異が分かりやすい「一般文化」を授業内で紹介している。2023年度は、中級の授業において、文化間コミュニケーションを意識したテーマを扱う韓国語教材を用いて、より本格的な文化学習を試みた<sup>3</sup>。授業では、韓国や日本に限定されないグローバル 이슈、リアルな社会問題について学び、他者の考えを聞いて自分の考えを表現する活動を重ねた。このような活動は、韓国語を使ったディスカッションにより韓国語の上達を図るとともに、相互理解学習を深めるねらいがある。誰かの、どこかの国の問題、あるいはフィクションとして眺めるのではなく、自らの問題として関心をもち、自文化を客観的に学ぶプロセスとして位置付けられる。國枝（2020）<sup>4</sup>が指摘する、自文化と異文化を比較しながら理解し、様々な境界を越えた文脈での相互理解を伴う文化学習を、言語授業の正規学習項目として導入し

たのである。

以上のように、2023年度は、授業内で学習意欲向上のための随時テストの導入、より多くのグループ学習機会の提供、文化学習教材を使用した学習活動を展開した。受講生の学習歴、学習目的や到達目標の違いを考慮した活動であるが、受講生間の言語能力の開きに対応する授業運営では依然課題が残る。課外活動への参加を奨励し、活動参加を通して学習意欲の向上、自主学習習慣の定着につなげたい<sup>7</sup>。さらに、授業内において、学生の関心事により近いトピックを取り上げ、言語学習との連携を強化していきたい。

## 2. 学習会活動

ここでは、2023年度前期に実施した課外活動の全体像について、概要を述べる。まず、活動は大きく分けて「韓国語検定対応の学習会」、「韓国の高校生とのオンライン交流」の2つである。それぞれの活動形式や活動期間などは表1の通りである。内容についての詳細は各章で述べることとする。

表1 2023年度前期に実施した課外活動一覧

課外活動		形式	運営	期間	実施回数	日時
①韓国語検定対応の学習会	2022年度 春季休業中 学習会	学習会	オンライン	2月22日 ～3月29日	5回	毎週水曜日 10:30～12:00
		自主勉強会				毎週土曜日 10:30～12:00
	2023年度 前期学習会	TOPIK I	対面	4月24日 ～7月10日	8回 10回	毎週月曜日 10:30～12:00
		TOPIK II				
②2023年度 韓国の高校生と のオンライン交 流	オンライン交流		オンライン	5月24日 ～7月12日	7回	毎週水曜日 12:55～13:25
	次回に向けての事前学習		対面			毎週水曜日 13:25～14:30

学習会では、主に韓国語能力試験（以下、TOPIK<sup>8</sup>とする）の対策を行っており、TOPIK I（1～2級）の指導を3年生が、TOPIK II（3～6級）の指導を実習助手が担当し、場所を分けて同時時間帯に実施している。学習会活動は、2022年度前期から2023年度後期の現在まで継続的に実施しているが、以下では主に、2022年度春季休業中（2月～3月）と2023年度前期（4月～7月）の取り組みについてそれぞれ報告する。

### （1）春季休業中学習会（2月～3月）

4月に実施されるTOPIK試験に備えるため、春季休業中にオンラインでの学習会を、週1回のペースで、全5回行った。学習会ではZoomのブレイクアウトルームを活用し、TOPIK IとTOPIK IIに分かれて同時時間帯に実施した。参加者は、9名（2年生6名、3年生サポーター3名）であり、TOPIK Iを3年生のサポーターが、TOPIK IIを実習助手が担当した。学習会の指導内容は主に、①単語テスト（前回の内容から出題）、②文法学習（新しい文法3つ）、③過去問の解答・解説である。文法学習では、写真1のようなスライド資料を作成し、できるだけ参加者に身近な用例を取り上げるよう心掛けた。また、学習会終了後には、毎回写真2の目標達成シートを記入してもらった。なお、授業資料および目標達成シートは、すべてグーグルドライブ上で管理を行った。

#### 【春季休業中学習会概要】

実施期間：2月22日～3月29日

実施回数：5回

実施形式：オンライン

延べ参加人数：18名

また学習会と並行して、週1回、参加者同士が自主的にオンライン上で集まり勉強する、自主勉強会を行った（写真3）。方法としては、参加者が自宅からオンラインでつなぎ、その日のリーダーが声掛けを行って各自勉強するというものである。勉強内容は、韓国語学習に関係するものであれば何でも可能とし



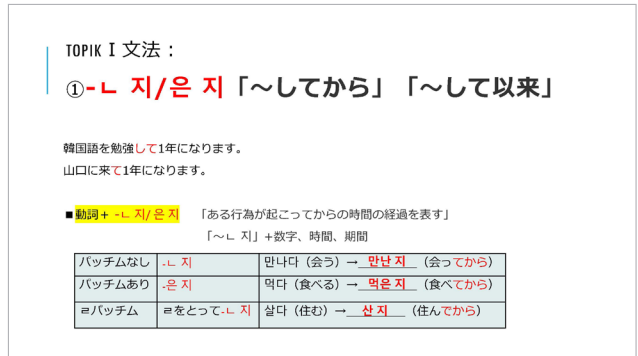
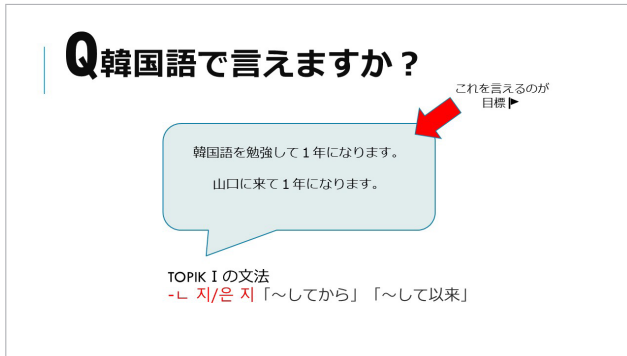


写真1 文法学習で使用したスライド資料例

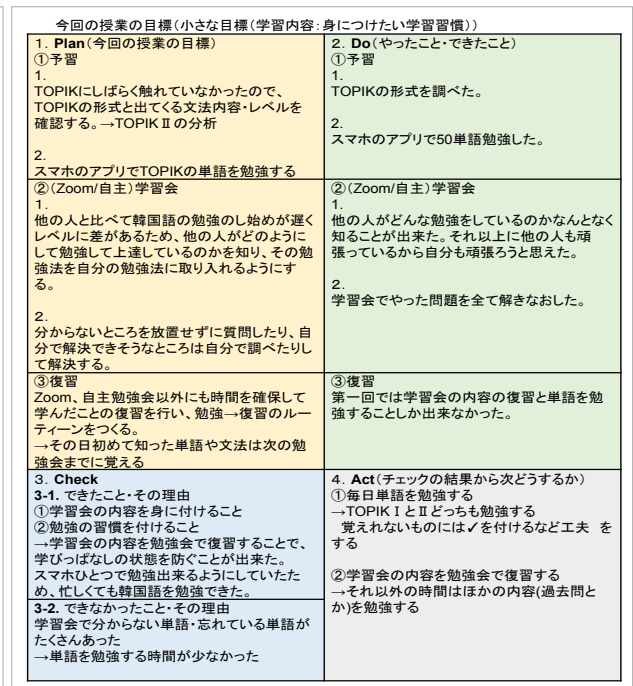
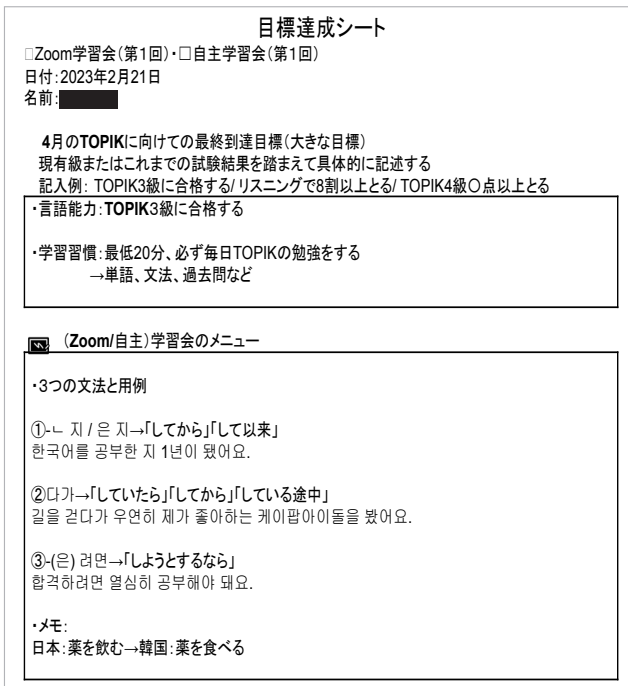


写真2 目標達成シートの記入例

た。勉強が終わった後は、リーダーに記録シートを提出させ、教員側が進捗を把握した。勉強中はお互いの手元を映すなど、さぼらないためのルールを決めて行った。参加者の記録シートによると、「各自黙々と集中して勉強できた」「他の参加者の様子が見えるため、モチベーションになった」という意見があり、自主勉強会の効果が見られた。しかし、課題点として、日により参加人数に大きくばらつきがあったこと、オンライン上でのリーダーの声掛けが難しかったことなどが挙げられた。

以上のようなオンラインでの学習会と自主勉強会の実施を通して、いくつかの気づきがあった。まず、学習会や自主勉強会は、正規授業でない以上、ある程度の強制力や報酬がなければ、継続はおそらく難しいだろうということが分かった。学習会の参加者は、4月にTOPIK試験の受験を控えた意識の高い学習者であったが、それでも回数を重ねるごとに参加者は減っていき、1名のみ参加という状況も2回ほどあった。参加者は、学習会に参加さえできればその効果を実感できるが、春季休業中ということもあり参加自体のハード

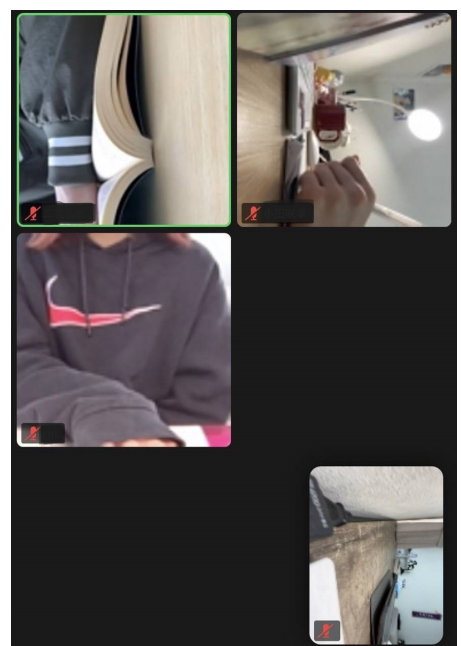


写真3 自主勉強会の様子

ルが高いようであった。よって今後は、参加者が継続的に自主学習を行えるような仕組みを考えていく必要がある。また目標達成シートについても、記入への負担から提出者が減り、継続が困難であった。目標達成に向けて自分の学習を見直し、次に生かすためのシートであったが、参加者の負担になっているのは本末転倒である。そのため、記述部分を減らすなど、大幅な改善が必要となった。

## (2) 前期学習会(4月~7月) : TOPIK II

次に、前期の学習会について報告する。まず(2)で、実習助手が担当するTOPIK IIの学習会について述べ、(3)で、3年生のサポーター(TOPIK 6級所持)が担当するTOPIK Iの学習会について述べる。

TOPIK IIの学習会は、週1回、対面で全8回実施した。参加者は4名(2年生3名、4年生1名)であった。学習会の内容は、オンラインでの学習会と同様、①単語テスト、②文法学習、③過去問の解答・解説を行った。実際の学習の様子は図4の通りである。

前期の学習会では、春季休業中の学習会での課題点をもとに改善を図った。まず単語テストでは、出題範囲が広く対策が難しかったところを、範囲を具体的に提示し、より得点が狙いやすいようにした。また、文法学習については、指導者側のスライド資料作成にかかる負担が大きかったことから、既存の教材を有効活用するようにした。

目標達成シートについては、参加者から記入が負担であるという声があったため、記述部分を大幅に減らし、学習の成果や態度などを簡単に5段階評価できる形式に作り替えた。また、参加者ごとに個別の学習記録用ファイルを作り、それぞれ学習目標の設定を行かせたあと、毎回シートをファイリングさせた。シートの記入とファイリングについては、後に述べるTOPIK Iの学習会およびオンライン交流にも同様に取り入れた。ファイルとシートの例は、写真5の通りである。シートへのフィードバックは手分けして行い、毎回異なる上級生が下級生にコメントするよう促した。これについて下級生からは、毎回いろいろな先輩から、励ましのメッセージや学習のアドバイスがもらえて嬉しかったとのコメントがあった。

しかし、課題点もあった。やはりシートをどれだけ簡略化しても、シートの記入自体が参加者にとって負担であり、記入が作業化している様子も見受けられた。また、参加者の人数が多いときは、管理側にと

### 【前期学習会(TOPIK II)概要】

実施期間：4月24日~7月10日

実施回数：8回

実施形式：対面

延べ参加人数：17名

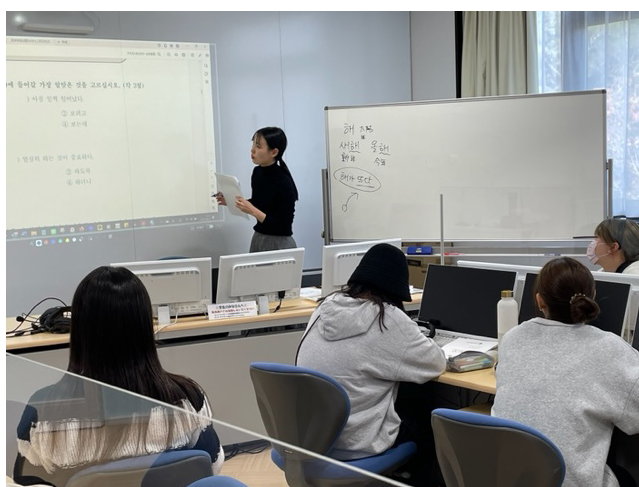


写真4 学習会(TOPIK II)の様子

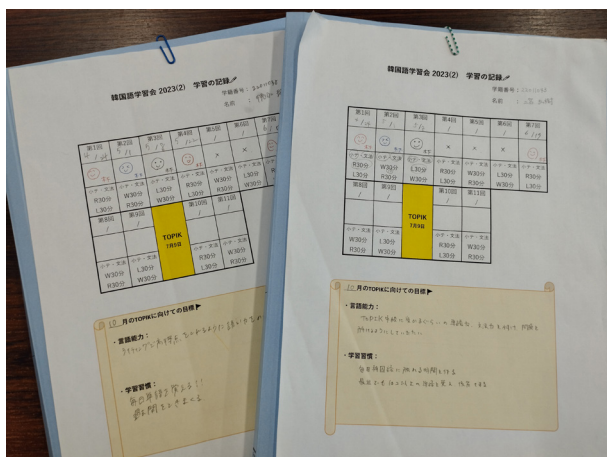
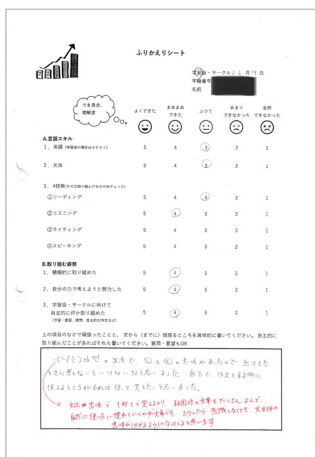


写真5 個別の学習記録用ファイルおよび、改善後のふり返しシートの記入例



ても大変であった。そのため、後期の学習会では、一旦シートの記入自体をやめることにした。最終的には、前後期のふり返しを行ってから、シート記入の在り方について検討する予定である。併せて、紙ベースではなくオンライン上で、参加者の学習状況が一元管理できる方法についても模索し



たい。

最後に、TOPIK II 学習会の、参加者のふり返り（参加者4名中3名回答）について述べる。学習会の満足度は、「とても満足（2名）」「やや満足（1名）」であり、参加者がおおむね満足していることが分かった。また、学習会が韓国語学習のモチベーション維持や向上に繋がったかどうかについては、「とてもそう思う（2名）」「ややそう思う（1名）」であった。少人数であり、客観的な満足度を図ることは困難であるが、一定の効果が見られた。自由記述では、「過去問をみんなで解くということが良かったので、継続して欲しい。他の人の解き方などを見ることで、自分の中でも解きやすい方法を見つけやすかった」「単語テストの実施、文法の学習がよかった」など、授業内容に概ね満足していることが分かり、共同学習による学習効果も見られた。学習会を通して成長した部分については、「単語力がついた」「文章を読む力が伸びたと思う。過去問を解く中で言いたいことが少しわかるようになった気がする」「ライティング力がついた」などが挙げられた。改善点や要望は特に見られなかった。今後もこのような指導形式を継続し、少人数ならではの、参加者に合わせた指導が行えるようにしたいと考える。

(3) 前期学習会（4月～7月）：TOPIK I

TOPIK I の学習会は、週1回、対面で全10回実施した。参加者は1年生6名であった。学習会の内容は、主に過去問の解答・解説である。

筆者は、韓国語学習サークル（ELC+Kサークル）の学習活動に参加していたが、後輩の韓国語学習会をサポートするために、学習会にも参加することになった。しかし、今まで韓国語を教えた経験がなく、自分に韓国語を教えることができるのか不安があった。また、学習会参加者の韓国語レベルに差があったため、どのように教えると参加者が満足できるか非常に悩んだ。学習会では、参加者の理解を深めるために、毎回授業資料を作成した（写真6）。その日に学習する文法や表現など、特に口頭の説明だけでは理解が難しいものについて、授業資料を用意して詳しく説明した。授業資料は、参加者に分かりやすいよう工夫し、時間をかけて何度もやり直しながら作成したため、学習会を準備するなかで最も大変であった。

この学習会を通して得た最も大きな学びは、他人に何かを教えることの難しさを知ったことである。自分の知識を他人に教える際に、必ずしも全員が自分と同じ方法で理解できるわけではないからだ。そのため、学習会ではこちらから一方的に教えるだけでなく、参加者全員で教え合うという方法を取り入れた。参加者の韓国語レベルに差があることを利用し、韓国語がある程度できる参加者が初級レベルの参加者に教えるなど、双方向の学習を促した。このようにして参加者には、それぞれ自分に合った学習方法を見つけるよう指導した。さらに、学習会のなかでは単語テスト（写真7）も実施し、語彙力の向上を図った。その結果、初期の頃と比較すると、参加者の語彙力や韓国語を読むスピードが上がり、韓国語のレベルが非常に高くなったように感じられた。このように、学習会を通

**【前期学習会(TOPIK I)概要】**  
 実施期間：4月24日～7月10日  
 実施回数：10回  
 実施形式：対面  
 延べ参加人数：36名

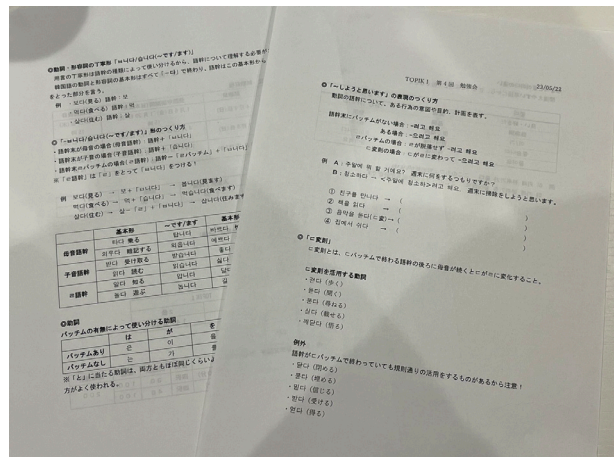


写真6 学習会で使用した授業資料例

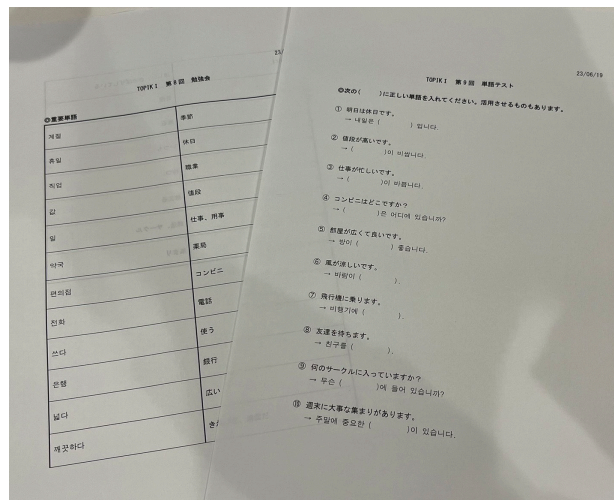


写真7 実施した単語テスト例

して参加者の成長が見られたため、嬉しかった。

最後に、TOPIK I 学習会の、参加者のふり返り（参加者6名中6名回答）について述べる。学習会の満足度は、「とても満足（5人）」「やや満足（1人）」であり、参加者がおおむね満足していることが分かった。また、学習会が韓国語学習のモチベーション維持や向上に繋がったかどうかについては、「とてもそう思う（5人）」「ややそう思う（1人）」であり、モチベーション維持にも効果的であったと見受けられる。

学習会についての感想には、「先輩が教えてくださったり、音読したりするのはとてもいいと思った」「先輩にわからないところを聞きやすかった」「音読をする時間や、問題を解く時間などが設けてあってよかった」「分からないところがあつた時に質問でき、友達と相談しながら問題を解けるのが良かった」「先輩が作成した資料がとても分かりやすかった」など、先輩から後輩への指導、友人との共同学習、学習資料の準備や音読練習などについての良い学習効果が見られた。また、学習会を通して成長した部分については、「簡単なレベルでのリスニング力、単語の区切り部分を把握する力がついた」「読みの力が伸びた。音読で連音化なども実践的に理解できた」「実際に韓国の学生と交流するときに自信を持って話せた」などの声が聞かれた。改善点や要望は特に見られなかった。今後も、先輩・後輩間のつながりをつくり、より学習しやすい環境づくりに取り組んでいきたいと考える。

### 3. 韓国の高校生とのオンライン交流活動

授業以外で取り組んでいる課外活動として、TOPIK学習会の他に、韓国の高校生とのオンライン交流が挙げられる。この活動は、山口県立大学の韓国語学習サークルである「ELC+Kサークル」を運営母体に、サークルのメンバーが企画・運営を行っている。このサークルは、これまで韓国語の自主学習の集まりとして機能してきており、これまでのサークル活動での経験が、今回のオンライン交流活動を運営する土台となっている。本章では、(1)で、「ELC+Kサークル」のこれまでの歩みについて述べ、(2)、(3)でオンライン交流について述べる。

#### (1) ELC+Kサークルの歩み

ELC+Kサークルは、韓国に興味、関心を持つ学生が、韓国語スキルの獲得はもちろん、多様な価値観と出会い、学生自らが学習の場を創るという目的を持って2017年から活動をしている<sup>11</sup>。

ところが、筆者が入学した2020年から21年までは「新型コロナウイルスの流行」によってあらゆる活動の自粛を余儀なくされた。コロナ禍で大学に入学し、ほとんどの授業がオンラインで行われたため、当時の生活は、入学前に想像していたものとはほど遠かった。そのような中、ELC+Kサークルに参加したが、サークル活動はあまり活発に行われていなかった。コロナ禍のため2年生の先輩は誰もおらず、3年生の先輩もすぐ引退し、私たち1年生がいきなりサークルを引き継ぐことになった。これまでサークル活動というのは、先輩や友人と様々な活動に参加し、新しい友人関係を築けるものだと思っていたが、想像と全く異なる状況に大きく混乱した。サークルを引き継いだ後は、全員で韓国の動画を見たり、音楽を聴いて歌詞を勉強したりと、コロナ禍で活動が制限される中でも、できることを探しながら活動を行った。筆者自身が韓国語を学ぶ側であったことから、韓国語の指導は難しいと判断し、「学習」よりも「趣味の交流」をメインとした活動を行った。

このようなコロナ禍での活動を通して得た学びは、次の3つである。1つ目は、サークルのメンバーと協力しながらサークル運営や活動の準備に携わることで、集団で活動することの難しさを体感し、協力し合うことの重要性に気づいたこと、2つ目は、意見交換を行いながら仲間と一緒に韓国語学習をすることがモチベーションになったこと、そして3つ目は、コロナ禍による行動制限がある中でも、その中でできることを考え、活動を企画する力がついたことである。何度か活動内容がはっきり決まらないまま活動を行い、サークルの時間をなんとなく過ごしてしまったことがあったが、その反省から、事前に計画を立てておくことの重要性を学び、以後、改善するよう努力した。



先輩がいないサークル活動には苦勞したが、筆者も3年生になり、現在は2年生を中心にサークル運営ができるようになった。コロナ禍での活動には困難が伴ったが、その中でも活動を継続してきたことで、ELC+Kサークルを中心に今回のような韓国語自主学习会や交流会の運営ができたと考える。このような経験から、今後も先輩・後輩や、他の人と協力して課題を解決し、活動を継続させられるよう努力したいと考える。

## (2) 2023年度前期のサークル活動とふり返り

2023年度は、サークルの新しい試みとして、韓国の高校生とのオンライン交流を実施した。サークル活動の中で、最初の30分をオンライン交流、その後の1時間を次週の事前学習に充てている。オンライン交流活動は現在サークルの代表である2年生が中心となっており、事前学習については、3年生が指導を行っている。ここではまず、3年生が担当する事前学習について、2023年度前期の取り組みを報告する。オンライン交流活動については、担当の2年生が後続の(3)で詳述する。

事前学習では主に、次週のオンライン交流テーマの確認および、関連フレーズ・単語の練習、そして韓国のことわざ、韓国や韓国語についての情報交換などを行った。関連フレーズ・単語の練習では、2年生が作成した資料(写真8)を使用した。また、時間が余ったときのために、簡単に学習できる韓国語のことわざを毎回用意しておいた。ことわざは難しいものが多いため、日本語のことわざに似ているものや、おもしろく親しみやすいものを選択した。

2年生が準備した資料は、サークル活動当日に3年生が受け取り、韓国語の間違いの確認や、より自然なフレーズへの修正を行っていた。しかし、2年生の負担を減らす観点から、資料作成も3年生が行った方がよかったかもしれないという反省があり、次年度の検討課題としたい。

最後に、活動を通しての気づきと課題点について述べる。気づきとしてはまず、事前学習を、韓国語学習歴の長い3年生が行ったことで、どのようなテーマにも臨機応変に対応できたということである。また、事前学習を通して、指導者側の3年生は復習となり、参加者側の1、2年生はより自然な韓国語のフレーズや単語を学べるため、互いにメリットとなる部分が多かった。さらに、他のメンバーと一緒に学ぶことで、知らなかった表現を学ぶことができたり、他の人の間違いから新たな学びがあったりと、一人の勉強とは違った学びがあった。他にも参加者は、分からないところをすぐに質問できたり、読み方の練習ができたりと、共同学習ならではの学びやすさがあったのではないかと考える。

活動を通して見えた課題点としては、参加者の積極性があまりないことが挙げられる。堅苦しい空気にならないよう気をつけていたつもりではあったが、自由な発言や質問はほとんどなく、各自がスマートフォンで調べることがほとんどであった。そのためせっかく対面で、少人数で活動しているのに、それが活かされていないと感じる場面が多かった。したがって今後は、コミュニケーションをとりやすい活動方法を考え、積極性のあるサークル活動を目指す必要があると考える。

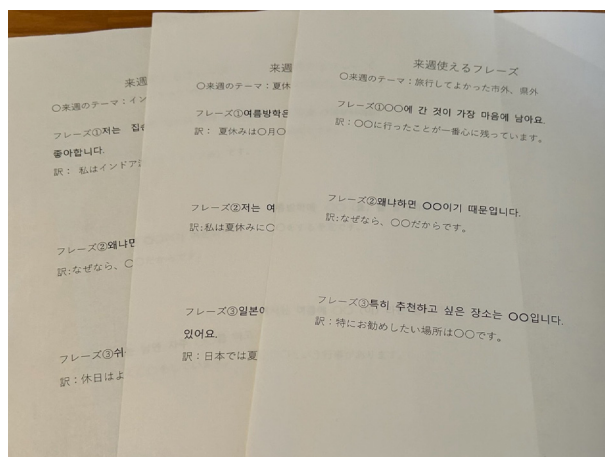


写真8 サークルで用いた学習資料



写真9 事前学習の様子



### (3) 韓国の高校生とのオンライン交流活動：活動のきっかけと概要

オンライン交流は、サークル活動の主担当である2年生が担当した。この活動は、本学に交換留学経験をもつ韓国の高校の先生と本学の実習助手の先生つながりから実現したものである。交流活動では、日本の大学生と韓国の高校生が互いに日本語と韓国語の教え手・学び手となり、アウトプットを通じた相互学習を促進している。2022年度12月には、初めてのオンライン交流が日本側7名、韓国側7名の計14名で実施された。そこでは、双方が住んでいる場所や学校の紹介、お互いに対する質問などを行い、親睦を深めた(写真10)。

初めての試みで参加者の反応が非常に良かったことから、2023年度は定期的な交流を企画するようになった。また、長期的な交流とするためにサークル活動の一環として位置づけ、毎週短時間の学習も並行して継続した。このような形式で行うことで、参加者は普段授業で学習したことをすぐにアウトプットできるため、韓国語能力の向上やモチベーションアップが期待できる。2023年度前期の活動には参加者が53名(日本人27名、韓国人26名)と、多く集まった。交流では、日本人2名・韓国人2名を1つ

の活動グループとし、グループごとにZoomのブレイクアウトルームに分かれて交流を行った(写真11)。毎週のトークテーマは、日本側が設定し、初めて話す相手でも比較的話しやすい話題(お互いの国で行きたいところ、長期休暇中の予定など)を選定するよう心掛けた。交流では、双方のスピーキング・リスニング能力向上のために前半15分と後半15分に分け、全員が日本語のみで話す時間と韓国語のみで話す時間を設定した。参加者は全員、現在学んでいる日本語および韓国語レベルが初級～中級であるため、相手の話していることが分からない場合は、翻訳アプリを使ったり写真を見せたりと、工夫しながらコミュニケーションを行った。



写真11 2023年度オンライン交流の様子

オンライン交流について参加者の意見を聞くと、「言語面」については、「リスニング力が上がった」「語彙が増えた」「分からないところを補い合う経験から、瞬時に翻訳して会話する能力がついた」「高校生の日本語が上手で、言語学習のモチベーションが上がった」「お互いが言語を教え合うという関係がよいと思った」「自分の実力はまだまだだと感じた」「なかなか韓国語が聞き取れず悔しかった」など、韓国人との直接交流を通して、自分の韓国語能力を実感したり、交流によって学習のモチベーションや刺激を受けたりしていることが分かった。また、「交流面」については、「韓国の文化や流行が知れてよかった」「初めて韓国人の友達ができて嬉しかった」「韓国での日本文化の認知度が知れたり、韓国のおすすめのものが知れたりしてよかった」「文化の違いを知れて面白かった」など、教科書にはないリアルな韓国について知ることが、参加者のモチベーションになっているようであった。一方課題点としては、オンラインの接続不良が最も多くあげられた。他には、交流時間が短すぎること、年齢や性別が違っていると話が弾みにくいこと、他の活動についての要望などが挙げられた。今後は、オンライン上で可能な他の活動内容についても検討し、活動の幅を広げていきたいと考える。例えば、全体でZoomをつなげてクイズや写真撮影など、今後詳細を

#### 【オンライン交流概要】

実施期間：5月24日～7月12日

実施回数：7回

実施形式：オンライン(交流)

延べ参加人数：山口県立大学学生168名・韓国の高校生166名



写真10 2022年度オンライン交流の様子

韓国側と話し合っていきたい。

最後に、オンライン交流の企画・運営を通して大変だったこと、および今後の課題について述べる。最も大変だと感じたのは、毎回のトークテーマの選別と、グループ分けである。交流は毎週行われるため、その度に適切なトークテーマを考えるのは、思ったより難しかった。日本語でも韓国語でも話しやすく、高校生でも大学生でも盛り上がることのできるテーマは何なのか、考えるのに苦労した。また、グループ分けについても、適切なペアを考え、さらに参加者からの要望にも対応しなければいけないため、やや煩雑になることもあった。例えば、日本人のペアを考える際に、最初は、韓国語が話せる2、3年生と韓国語がまだ話せない1年生をペアで組んでいたが、参加者からは、友達同士の方が話が盛り上がるという声が多かった。そこでペアを1から組みなおし、次回からはそのペアで継続して交流を行ってもらうことにした。しかし、交流を行っていくうちに「次の交流は〇〇さんと同じグループをお願いします」「ペアではなく、1対1で〇〇さんと話したいです」という要望が多くなり、対応に苦労した。これらの反省から今後は、トークテーマの選定については手分けして行い、グループ分けについては、ある程度ルールを設けるなどして、よりスムーズに運営できるようにしていきたい。

また、今後もオンライン交流を継続できるように、後輩にはオンライン交流の運営の仕方についてしっかりと引き継ぎをする必要がある。そのためにも今後、後輩には参加者として単に活動に参加するだけでなく、徐々に活動の主軸となってもらうように調整していきたい。次年度（2024年）に向けてサークルの代替わりが行われるが、活動のよりよい継続のために、代替わり後も、今の先輩方がサポートしてくれたように、後輩のサポートを行っていきたいと思う。

## おわりに

以上、山口県立大学における韓国言語学習の背景と課題を踏まえたうえで、2023年度に実践した授業内外でのアクティブ・ラーニング活動についてまとめた。第1章では、授業数が少ないうえに大人数クラスであること、20年に及ぶ韓流ブームの影響で受講生の言語能力や学習目的・到達目標の多様化が進み、授業運営に課題が多い状況について概観した。諸課題を改善して学習効果を高めるために、授業では、グループ学習を多用した柔軟な授業運営と、事前事後学習内容に関する随時テストを導入することで自主学習の習慣化をサポートした。さらに文化的な点に学生の関心が高いことから、文化学習を導入し学習意欲の向上を図った。

また、授業だけでは十分な学習が困難な現状を踏まえて、持続可能な課外活動の模索と体系化を図った。第2～3章では、2023年度前期において実践したTOPIK学習会の実施状況、及びサークル活動での韓国語学習と韓国の高校生とのオンライン交流活動について述べた。TOPIK学習会は二人の先輩（実習助手と3年生）が先生となって運営した。これは、多様な学習目的・レベルの学生が参加する大人数授業と違い、検定合格という、より具体的な目標を持った小グループでの学習である。実践報告には学習会運営の大変さとともに、学習会担当者や参加者双方の達成感が詳述されており、今後の学習会運営に示唆するところが大きい。また、ラーニングピラミッド（Learning Pyramid）にあるように、他者に教えることが学習効果・定着度の面で有効であることも確認できる。オンライン交流活動においても、共同学習での対話の重要性や自分の学びを次年度以降の活動に引き継ぎたい旨の記述が確認できる。自主グループ活動を通して対話力の向上も見受けられる。そしてこのような活動を、サークル活動の一環として取り組んだことも自主学習交流会の定着を容易にした一因と見受けられる。

授業と課外活動での能動的な学習方法の導入、学習量の絶対的な増加、そして学び仲間からの学習意欲の刺激など、韓国語学習者にとって学びやすい環境づくりができたと考える。参加者からも学習交流活動の継続要望があったが、次年度以降も継続できるように、2023年度後期の活動についても検証を進めたい。

- 1 文部科学省「新しい学習指導要領の考え方」([https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/new-cs/\\_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf))
- 2 2022年末現在、中長期在留者は17394名で、47都道府県の中で27番目に多い。国籍・地域別では、「韓国・朝鮮」(5,113名:29.4%)が最も多いが、在留資格別でみると、「特別永住者」が26.2%(4,561名)と多い。県内在住の外国人数はもちろんのこと、韓国語母語の人が少ない状況がわかる。(「本県における外国人住民等の状況」<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/95/17682.html>)
- 3 韓国語学習に関心を持つ学生が増加し、第2外国語として「朝鮮・韓国語」科目を開講する大学数も増加傾向を維持している。2022年の「外国語教育の実施状況」によると、国公私立795大学の62.1%に達する466校において「朝鮮・韓国語」科目が開設されている。英語729校、中国語602校に次ぐレベルである(文部科学省(2020年5月1日現在)「令和2年度の大学における教育内容等の改革状況について(概要)」)。
- 4 言語運用における文化的な差異を解説する方法は、言語と文化を連携する典型的な方法であり、他の韓国語授業でも多く試みられる文化学習活動といえる(金泰虎(2016)「言語学習における文化教育:外国語として韓国語を学ぶ日本人学習者を中心に」、甲南大学国際言語文化センター『言語と文化』(第20号)、pp.63-80)。
- 5 金恵媛・文珍英(2023)『文化で学ぶコリアン』白帝社。
- 6 國枝孝弘(2020)「特集多言語多文化共生社会に向けた挑戦 外国語学習における相互文化教育を通したリフレクションと批判精神の育成について」慶應SFC学会『KEIO SFC JOURNAL』Vol.19 (No.2)、pp.176-190。
- 7 授業外活動としては主に自主学習活動を行っているが、2章以降で詳述する。
- 8 国際文化学科では、韓国語に関心のある学生には「韓国語能力試験」(TOPIK)4級以上の取得を推奨している。「韓国語能力試験」の詳細については当協会ホームページを参照されたい。( <https://www.kref.or.jp/examination> )
- 9 TOPIKの上級(5・6級)を取得している上級生には、サポーターとして学習会(TOPIK I)の指導を依頼している。
- 10 金恵媛・石原さや・木下裕賀(2018)「対話的なアクティブラーニング実践:韓国(語)学習コミュニティと留学ロードマップ」、『山口県立大学学術情報』第11号、pp.145-154。
- 11 サークルの立ち上げや活動の目的については金ほか(2018)を参照されたい。